北海学園大学附属図書館報

図書館だより

1997. 7.10

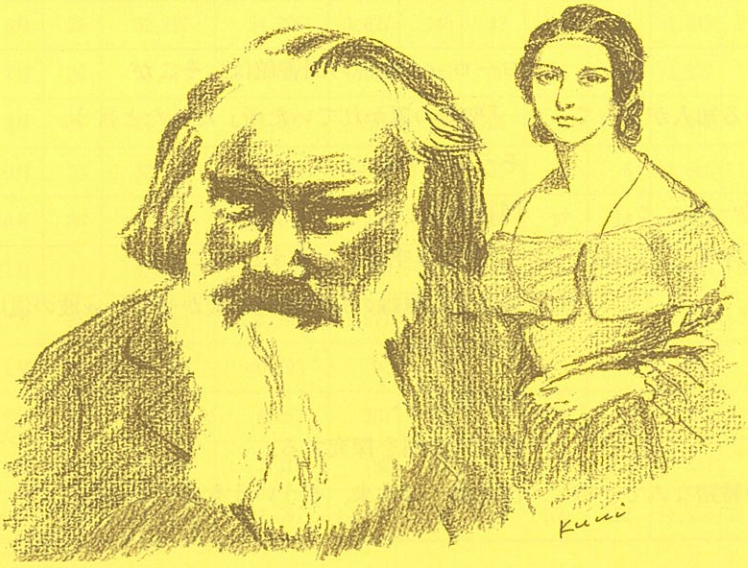
第19巻2号

通巻142号

Bulletin of the Hokkai Gakuen University Library

木の葉の便り

画と文・國田祐作



音楽会に出かけると当日のプログラムのほかに演奏会の予告のチラシがどっさり渡される。休憩時間にパラパラとめくって、たいていは屑箱に捨てられてチラシの出番はおしまい。木の葉が風に吹かれて散るごとくである。このテの印刷物を英語ではリーフレットというが、これも木の葉から来ているのだから言い得て妙である。

ことしはブラームスの没後100年にあたるのでブラームスの演奏会が目白押しである。友人のピアニストからもブラームス・リサイタルのチラシを頼まれた。ブラームスとその周辺の作曲家をとりあげてその時代を浮び上がらせようという趣向らしい。

ハンブルグの港町のカフェでピアノを弾いていた少年は町を出て作曲家を志した。最初にその才能を認めたのがロベルト・シューマン、ブラームス20歳のときであった。青年はシューマンの妻をひと目見たときから永遠の思慕を抱くようになる、とは伝記物語にあるとおり。6人の子を抱え献身的に夫を支えたクララの生涯は映画にもなった。ヨシ、純愛路線で行こう。あとはブラームスに引きたてられて楽壇にデヴューしたドヴォルシャク、意外にも仲良しだったワルツ王ヨハン・シュトラウス、この二人の顔をアレンジすればいいだろう。というわけでチラシのデザインが決ったしだい。

ブラームスの肖像は何枚もあるが、たいていはコワイ顔をしていて近寄り難い。かえって晩年の写真の方がいい。白いひげに顔を埋め、憂愁を過ぎて平安自然の姿がある。5フィート5インチ(165センチ)のずんぐりした体つきに親しみがもてる。クララの死を追うようにその翌年64歳で世を去った。1897年、ちょうど100年前のことである。クララの肖像はドイツの100マルク紙幣になっているが、これはあまり魅力がない。原画(クネッセ画)の若い時の思いつめたような表情がいい。

こうして出来あがったチラシだが、やっぱり木の葉のように路上に散っていくのである。それでも、ひととき手にするひとの心に留まってくれたら、というねがいはある。

(くにた・ゆうさく　教養部教授　芸術論)

'96 フロントアングル

心は貴く、されど靴音は低く

～聖なる空間としてのライブラリーのために～

今から30年も昔の話である。
国立国会図書館を訪れたことのある知人が言っていた。
「靴音は聴かれず、話す声はなかった」と。
おそらくは、今でもそのマナーは守られていると信ずる。

これに比して、
本学図書館の騒音は少々耳に障る。
試験期の利用は混み合う地下鉄の雑踏なみで、特に、階段の靴音は
金属音なみの高さになる。
勉強している人も、フロントでサービスに当る職員もこれではたまらない。

ヨーロッパ起源の図書館は、そこが
「聖書の置かれていた所」だったと言う。
そうだとすると、
図書館は
「聖なる空間」と言うことになる。
雑音とは無縁の知的探究に欠かせないα波の温床であったろう。
時に瞑想し、
時には法則を探究する。
図書館とは本来、そういうものであった。

心は貴く、されど靴音は低く。
そうしてはじめて、ホーリィ（聖なる）世界が啓らけると信じたい。

約1,600万階段音。

'96年度の入館者は約32万人。
これは在籍学生数8,000人の約40倍。
これが、実質的な奉仕対象者数。
階段数を往復50段としてみると、32万人が立てる足音はざっと1,600万段音。

なお続く利用増の傾向

△開架図書利用（推定）
13万冊（11万冊）　昨年比＋2万冊増
△貸出冊数（学生、院をふくむ）
22,628冊（21,560冊）　昨年比＋1,068冊増
いずれも本館。（　）は前年実績。

1996年度閲覧統計

月	開館日数	1階入口の入館者数	2階以上の入館者数	貸出人数					計(人)	貸出冊数					計冊
				学生	教員	院生	職員	学外		学生	教員	院生	職員	学外	
4月	25	47,042	31,405	837	173	46	9	21	1,086	1,354	1,365	158	26	42	2,945
5月	23	48,047	32,548	1,209	146	34	6	18	1,413	1,984	755	82	30	31	2,882
6月	25	52,197	34,296	1,627	145	42	16	15	1,845	2,773	1,057	114	34	26	4,004
7月	26	51,573	32,096	1,621	144	30	16	16	1,827	2,977	1,122	111	22	32	4,264
8月	27	27,923	17,307	511	99	25	4	2	641	944	744	69	7	3	1,767
9月	23	53,428	34,999	916	118	37	8	6	1,085	1,488	778	127	12	23	2,428
10月	26	38,187	24,462	1,437	131	26	17	14	1,625	2,456	785	65	22	22	3,350
11月	24	42,223	28,183	1,498	141	26	11	9	1,685	2,532	750	59	13	14	3,368
12月	25	43,111	30,137	1,971	104	22	3	9	2,109	3,637	570	41	2	22	4,272
1月	19	57,891	40,793	93	98	19	4	6	220	154	527	60	4	22	767
2月	20	11,392	8,052	361	78	20	9	3	471	730	557	148	22	5	1,462
3月	25	12,847	7,319	182	117	35	6	3	343	321	900	244	12	15	1,492
合計	288	485,861	321,597	12,263	1,494	362	109	122	14,350	21,350	9,910	1,278	206	257	33,001

グループ読者室使用記録

月	グループ数	人数(名)
4月	3	10
5月	7	41
6月	14	136
7月	15	68
8月	0	0
9月	1	4
10月	4	24
11月	7	37
12月	13	99
1月	3	19
2月	1	5
3月	0	0
合計	68	443

A.Vブース使用記録

月	利用数				
	学生	院生	教員	その他	計(人)
4月	29	1	0	2	32
5月	41	2	0	3	46
6月	28	0	1	0	29
7月	30	0	0	0	30
8月	5	0	0	0	5
9月	16	0	1	0	17
10月	45	0	1	0	46
11月	59	1	0	0	60
12月	32	0	0	0	32
1月	16	0	1	0	17
2月	6	0	0	0	6
3月	5	0	0	0	5
合計	312	4	4	5	325

所蔵調査及び館外貸出

（本館より依頼）

依頼先	貸出依頼				所蔵調査依頼			
	依頼件数	冊数	実行数	冊数	依頼件数	冊数	実行数	冊数
国立国会図書	10	11	10	11	14	14	10	10

（本館より依頼）

依頼先	貸出依頼				所蔵調査依頼			
	依頼件数	冊数	実行数	冊数	依頼件数	冊数	実行数	冊数
国公立大(北大)	12(3)	14(4)	8(3)	10(4)	15(11)	23(19)	14(9)	21(16)
私立大(道内)	12(3)	43(33)	11(3)	42(33)	9(3)	9(3)	7(2)	7(2)
公共図書館	0	0	0	0	0	0	0	0
公共利用	0	0	0	0	0	0	0	0
その他	0	0	0	0	0	0	0	0
合計	24	57	19	52	24	32	21	28

（他館より受付）

依頼先	貸出依頼				所蔵調査依頼			
	依頼件数	冊数	実行数	冊数	依頼件数	冊数	実行数	冊数
国公立大(北大)	1(0)	1(0)	1(0)	1(0)	1(1)	1(1)	0(0)	0(0)
私立大(道内)	3(2)	3(2)	3(2)	3(2)	8(1)	11(3)	3(0)	3(0)
公共図書館	3	5	2	3	0	0	0	0
公共利用	0	0	0	0	1	4	1	4
その他	2	11	2	11	1	1	0	0
合計	9	20	8	18	11	17	4	7

複写依頼

（本館より依頼）

		依頼数(件)	実行数(件)
国公立大図(道内)		26(6)	18(4)
私立大図(道内)		46(12)	45(12)
国立国会		250	242
その他	公共利用	0	0
	その他機関	0	0
合計		322	305

複写受付

（他館より受付）

		受付数(件)	実行数(件)
国公立大図(道内)		17(1)	14(0)
私立大図(道内)		68(22)	64(21)
その他	公共利用	3	3
	その他機関	4	3
合計		92	84

● 蔵書冊数の推移 ●

平成 9 年 3 月 31 日現在の蔵書冊数

総計表　(1)+(2)

	和　　書	洋　　書	合　　計
冊　　数	435,586冊	146,735冊	582,321冊
和・洋書比率	74.8%	25.2%	100.0%

(1)　年度別受入図書の冊数表　(過去 10 年間の推移)

年　　度	和　書（冊）	洋　書（冊）	合　計（冊）	昭和62年度を100%としての比率(%)
昭和24～61年	209,719	88,902	298,621	
62年	15,799	5,198	20,997	100.0
63年	19,640	5,400	25,040	119.3
平成元年	20,820	4,500	25,320	120.6
2年	17,680	4,600	22,280	106.1
3年	18,428	6,519	24,947	118.8
4年	23,100	8,540	31,640	150.7
5年	17,080	5,237	22,317	106.3
6年	18,060	6,720	24,780	118.0
7年	20,040	5,000	25,040	119.3
8年	17,820	4,880	22,700	108.1
合　　計	398,186	145,496	543,682	

(2)　文庫等の蔵書数

文庫名	北駕文庫	戸津文庫	上原文庫	小林文庫	博士論文	修士論文	卒業論文	合　計
和　書	31,113	891	2,765	2,197	1	115	318	37,400
洋　書	－	58	606	575	－	－	－	1,239
合　計	31,113	949	3,371	2,772	1	115	318	38,639

新着図書

●経済関係

人間発達と社会環境　世界を知る・日本を読む　社会環境論研究会編　労働旬報社
マルクスの逆襲　政治経済学の復活　伊藤誠［ほか］編著　日本評論社
経済安定本部戦後経済政策資料 38－41 別巻　総合研究開発機構（NIRA）戦後経済政策資料研究会編　日本経済評論社
日本経済を読む　〈生活優先社会〉の条件　清山卓郎著　労働旬報社
フランス対外経済関係の研究　資本輸出・貿易・植民地　菊池孝美著　八朔社
日米経済ハンドブック　1996 年　経済団体連合会編　ジャパンタイムズ
日本航空・全日空　混迷からの脱出なるか、航空　大橋英五著　大月書店
EMS：欧州通貨制度　欧州通貨統合の焦点　田中素香編著　有斐閣
社会保障行政入門　岡光序治編著　有斐閣
医療保障とその仕組み　岡崎昭著　京都　晃洋書房
問われる女性の人権　北京 1995・第 4 回　世界女性会議／日弁連レポート　日本弁護士連合会編　こうち書房
会計学大辞典　森田哲弥［ほか］編集　第 4 版　中央経済社
鉛　環境中の鉛と生体影響　堀口俊一著　労働科学研究所出版部
高圧環境と健康　真野喜洋著　労働科学研究所出版部
現代労働衛生ハンドブック　三浦豊彦［ほか］編　増補改訂第 2 版　労働科学研究所出版部
全国市町村地域農業活力図鑑 1 －10 別巻　農林水産長期金融協会編集　農山漁村文化協会
生産管理入門　小川英次著　改訂増補版　同文館出版
地方拠点都市地域基本計画データーブック　全国地方拠点都市地域整備推進協議会編　ぎょうせい
財務会計の基礎　浜田弘作著　8 訂版　多賀出版
マーケティング英和辞典　徳永豊［ほか］編　同文館出版

●法律関係

公職追放　三大政治パージの研究　増田弘著　東京大学出版会
（新）地方自治法講座 4、5、7　園部逸夫［ほか］編集　ぎょうせい
法と経済学　岸田雅雄著　新世社
福島正夫著作集　第 2 巻　福島正夫著　勁草書房
日本立法資料全集　別巻　71　信山社出版
新・判例コンメンタール民法　11　島津一郎、久貴忠彦編　三省堂
フランス法律用語辞典　レモン・ギリアン、ジャン・ヴァンサン［編著］　Termes juridiques 研究会訳　三省堂
枢密院会議議事録　第 94 巻　枢密院［編］　東京大学出版会
憲法　長谷部恭男著　新世社
ドイツの憲法判例　ドイツ憲法判例研究会編　信山社出版
アフリカ憲法の研究　中原精一著　成文堂
民法学と比較法学の諸相　山畠正男・五十嵐清・薮重夫先生古稀記念　1　山畠正男先生・五十嵐清先生・薮重夫先生古稀記念論文集刊行発起人編集　信山社出版
犯罪被害者の研究　宮沢浩一［ほか］編　成文堂
（解説）実務書式大系　16　三省堂
裁判実務大系　26　青林書院
民事弁護と裁判実務　6　ぎょうせい
民事訴訟法判例研究　山木戸克己著　有斐閣
韓国民事訴訟法　金祥洙著　信山社出版
国際私法　桜田嘉章著　有斐閣
雇用関係法　山川隆一著　新世社

正　誤　表

19 巻 1 号
P 2 左段　サハリン事件　→　サリン事件
P 6 右段　フランシス嬢　→　フロレンス嬢
P 7 右段　Archdeaacon　→　Archdeacon

●人文関係

国書読み方辞典　植月博編　おうふう

守覚法親王の儀礼世界　仁和寺蔵紺表紙小双紙の研究　本文篇　1、2　仁和寺紺表紙小双紙研究会編　勉誠社

(叢書) 禅と日本文化　第1巻　ぺりかん社

中世風狂の詩　一休『狂雲集』精読抄　蔭木英雄著　京都　思文閣出版

新約聖書　和文／新共同訳　英文／TEV対照　日本聖書協会

国書人名辞典　第3巻　市古貞次［ほか］編　岩波書店

日本外交文書　明治　18　外務書編　復刻版　巌南堂

西郷竹彦文芸・教育全集　11、12　西郷竹彦著　恒文社

ユネスコ世界遺産　1、8　講談社

仮名文章表現史の研究　秋本守英著　京都　思文閣出版

日本語教授法基本文献　興水實　芳賀登監修　復刻版　冬至書房

春日政治著作集　1－8　春日和男編集・解説　勉誠社

(集英社) 世界文学大事典　1　『世界文学大事典』編　集委員会編　集英社

明治翻訳文学全集〈新聞雑誌編〉1-2　川戸道昭　榊原貴教編　大空社

(岩波講座)日本文学史　6、9　久保田淳［ほか］編集　岩波書店

昭和文学年表　7、8、9　浦西和彦、青山毅編集　明治書院

心の花　復刻版　第4期　23－25 (1919－1921)　教育出版センター

冷泉家時雨亭叢書　第17巻　冷泉家時雨亭文庫編　朝日新聞社

西条八十全集　第10巻　西条八十著　藤田圭雄［ほか］編集　国書刊行会

日本の名随筆　別巻　69、70　作品社

●工学関係

知のモラル　小林康夫、船曳建夫編　東京大学出版会

学ぶとは何だろうか　鶴見俊輔座談　鶴見俊輔著　晶文社

ニューラルネットワークLSI　岩田穆、雨宮好仁編著　電子情報通信学会編　電子情報通信学会

知的人工生命の学習進化　佐野千遙著　森北出版

Macintoshユーザのための C++　D. マーク著　データリンク訳　トッパン

図書館建築22選　図書館計画施設研究所編著　東海大学出版会

読書の森の散歩道　森毅著　青土社

宗教なき時代を生きるために　森岡正博著　京都　法蔵館

外される日本　アジア経済の構想　市川周著　日本放送出版協会

無心の画家たち　知的障害者寮の30年　西垣籌一著　日本放送出版協会

文化の自然誌　煎本孝著　東京大学出版会

川と湖の博物館　生物からのメッセージ4　山海堂

心は遺伝子をこえるか　木下清一郎著　東京大学出版会

測量学要論　加藤清志著　産業図書

スーパー測量　内山一男著　日本理工出版会

測量学　一般論　米谷栄二、山田善一共著　新版(第6版)　丸善

一般測量学　岡積満著　再訂版　森北出版

環境リスク論　技術論からみた政策提言　中西準子著　岩波書店

建築家捜し　磯崎新著　岩波書店

建築立体図法　アクソメからパースまで　田山茂夫著　技術書院

外壁仕上げの損傷事例原因と対策　日本建築仕上学会編　技術書院

外壁剝落防止のための設計・施工指針・同解説　日本建築仕上学会編　技術書院

宮脇檀の住宅　宮脇檀建築研究室著　丸善

新着図書

●一般・教養関係

新島襄全集　7　新島襄［著］　新島襄全集編集委員会編　同朋舎出版

ヘーゲル全集　12　ヘーゲル［著］　岩波書店

異端カタリ派の哲学　ルネ・ネッリ［著］　柴田和雄訳　法政大学出版局

現代聖書講座　第1巻　日本基督教団出版局

日中文化交流史叢書　第10巻　中西進［ほか］編集　大修館書店

日本民俗誌集成　第5巻　倉石忠彦［ほか］編集　三一書房

（全集）日本の食文化　第6巻　雄山閣出版

肉筆浮世絵大観　9　小林忠編著　講談社

音楽と病　病歴に見る大作曲家の姿　ジョン・オシエー著　菅野弘久訳　法政大学出版局

ユートピア旅行記叢書　第1巻　赤木昭三［ほか］編集　岩波書店

つかこうへい戯曲シナリオ作品集　4　つかこうへい著　白水社

現代英語文法　大学編　S. グリーンバウ著　新版　紀伊国屋

王　ドナルド・バーセルミ著　白水社

木下是雄集　1　木下是雄著　晶文社

森銑三著作集　続編　別巻　森銑三著　中央公論社

太宰春台　田尻祐一郎著　明徳出版社

戦争の時代　50年目の記憶　上、下　朝日新聞名古屋社会部著　朝日新聞社

イースター島の謎　カテイリーヌ・オルリアック著　創元社

モンテスキュー政治思想研究　政治的自由理念と自然史的政治理論の必然的諸関係　佐竹寛著　中央大学出版部

国連システムを超えて　最上敏樹著　岩波書店

上田辰之助著作集　7　英文学における南海泡沫会社　上田辰之助［著］　みすず書房

日本とアメリカ－数字は語る　2、3　日本貿易振興会

地域福祉　牧里毎治［ほか］編　有斐閣

表現者として育つ　佐伯胖［ほか］編　東京大学出版会

ジョンバチェラー博士

バチェラー夫人ルイザの姪であるフロレンスは、1937年（昭和12年）来日以来、ハートフォードの教会仲間にあてて幾度か滞在報告記を送っている。1938年12月20日付の便りではひとしきり伝道関係のことを述べた後、自分が来日したもう一つの大事な目的、辞書編纂の手伝いの模様に触れている。

〝……伯父の〈アイヌ英和辞典〉第四版の校正に昨冬中没頭し、四月には東京に出向かなければならなかったのです。親切な日本人家族のご厄介になったのですが、そこのご主人得能氏（篤志家）は夕方にはいつも辞書の日本語部分を訂正して下さいました。昼間は私と伯父でアイヌ語と英語の部分をみる、という訳です。この本は日本にとっても画期的なものとみなされるようで、今年十一月にやっと出版されました。〞

この手紙に添えてある日記体の東京詣で旅行記も面白い。4月8日に札幌を出て10日に東京に着き得能家に迎えられて

〝……濃紺の着物を来たご主人が日本語の校正をして下さる〞

日々なのであるが、家族のメンバーについての記述も親しみのこもったものだ。5月10日の日記には

〝……校正が兎も角も一応終わりに近づき、由緒ある出版社の社長で熱心なキリスト教徒でもあるという岩波氏との面談の機会が訪れた。電話で時間を取り決め、得能夫人に伴われて出かけた。夫人自身学者であるわけではないが、夫と共にこの辞書編纂に興味を持って下さり、温かく支援して下さるのだ。岩波氏はがっちりした体格で、ビジネス的物腰のいかにも賢そうな人である。得能夫人が事の次第を縷々と語るのをテキパキとノートに取った。ひとしきり会話が取り交わされた後、バチェラー博士が加わったのだが、察するに、全て順序どうり事が運びそうで、5月の終りまでには校正完了すること、二冊は特別装丁にし、一部を

の郷里を訪ねて ③

Cornish 篁子

今上天皇にあとの一部は英国王ジョージ六世に献上の予定ということになった。″
と記している。ルイザ亡き後フロレンスの応援を必要とした語彙二万余のアイヌ語辞典は師の心血を注いだ畢生の仕事である。

初版は1889年に道庁から出したが増補改訂二版(1905)三版(1926)では教文館となり、第四版に至って岩波書店が引受け菊版八百五十三頁で出版された。フロレンスの日記にある通り5月末に校正が済むや刊行にかかったのであろう。6月には出版されるという岩波の早業である。当時の時勢から紙の制限があり辞書類の刊行としては前後数年中の唯一のものとなったようである。出版後一月もすると反響が出、批判もあった。師は力の及ぶ限り弁護し、出来ないところは素直に誤りを認めているようである。しかも五版を目指しての改訂に直ぐとりかかっているのではないかと思われるのだ。四版が出てから一年余で日本を離れカナダ滞在を経て1943年初夏に帰英したことは前回稿に記した。ハートフォードに持ち帰った分に沢山の書き込みがあるのである。アイヌ語の権威知理真志保氏(金田一京助の弟子)が辛辣な舌鋒でこの辞典を攻撃した1942年にはモントリオールに居たが、まさか〈言語を虐殺して顧みざる者〉とよばわれ、〈結局どれもこれも駄目な〉言語研究とまで言われたなど露しらず営々と加筆訂正を続けている。師の死後、ロンドン大学に蔵書が寄贈されたが、その中の四版を繰るとそれが判る。ペンや鉛筆での書き込みがあるのだ。色も呆けてきているが、黄色い差し込み紙に細々と注釈をつけている部分もある。特にアイノという言葉にはこだわっているようで、辞典の奥付けの対頁に貼りつけてある友人某にあてた師自筆の手紙には、日本人がそれを蔑称的に使っていることの説明の後、
"... Is it not a very unscientific and unnatural term of dishonour? The aborigines of Hokkaido certainly do not call themselves AINO but AINU. By derivation the name means thinkers. A good and beautiful dcsignation indeed. Prof. B.H. Chamberlain and Dr. Jimbo and I several times discussed this Ainu."
と結んでいる。このアイノ解釈に関しては1936年北海道来臨の天皇に奉上したスピーチでも触れている。そして、四版の20頁にAino-a former and non-native way of calling AINUと明記してあるが、この勢いでは次版ではもっと説明を加えなければならないと思っていたのではなかろうか。76頁のCHIKAP-HUPチカップフップ　ゴエフマツにはCHILKAP-HUP may also be translated by "having boils on the bark"の鉛筆書きが加えられ、同様の加筆訂正が各所に散見される。新語をいれてある部分もある。

たとえば501頁に、TOI-SHU　土鍋　an earthen pot TOISOK or TUISOK n. the bottom of a grave TOISOK-KEU n. anything placed in the bottom of a grave for the corpse to rest onと黄紙に書きつけて頁の端に貼ってある。言語学上の正否は私には全くわからないが、90歳の師の孜孜としてやまない勉学心、執念ともいえる情熱をそこにみる。戦局が緩和したら又極東の私が愛してやまない国へ戻って、し残した仕事を片づけたいと亡くなる数ヵ月前に土地の記者に語っていたが、札幌のバチェラー学園のことは言うまでもないとして、辞典の改訂も大きく彼の心を占めていたに違いない。付記するが、ロンドン大学ソアス図書館にはバチェラー師遺図書として次のようなものがある。

Ainu Life and Lore (Echoes of a Departing Race)
(Publisher kyobunkan, 1927)
The Ainu of Japan (The Religion, Superstitions and General History of the Hairy Aborigines of Japan.)
(Published by The Religious Tract Society, 1901)
The Ainu and their Folk Lore
(Published by the Religious Tract Society, 1902)
Dictionary-Ainu-English-Japanese Dictionary Third Edition (Publisher kyobunkan)
そして上記の第四版である。　以上

(セッコ　コーニッシ　ロンドン大学)

「Paul I. Ota」のことなど

石村義典

「北駕文庫」との初めての出会いはほぼ三十年前、そして私の人生において、いま再度の出会い、それに分け入る時間をもっている。でもその入口で進むべき方向さえ見通すことができず、行きあぐんでいるといっていい。森全体をみるということは、私にはまだ先の先のことのようである。先がみえないが、その森を通過した人々の幾人かに出会い、その彼等のはるかな時間に立ち止まることがある。

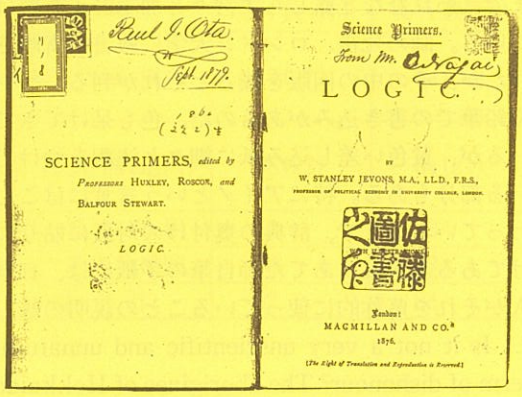
「Paul I. Ota, Sept. 1879. From Mr. O. Nagai」とのサインをのこす洋書（Logic by W.S. Jevons）に出会い、その書込をのこしていった人の温もりの痕跡をたしかめようとしたこともある。門限八時、消灯時間十一時、消灯時間をすぎてのランプのもとでの読書は、その始末書の提出につながることであった。この「Paul I. Ota」との書込をのこした少年達の生活空間を記録した資料を覗く機会をもった時、そうした始末書にこれでもか、これでもかという頻度で出会ったことがあり、深夜の寮の廊下をゆく彼らの跫音をも偲んだりした。「Paul I. Ota」とは太平洋の架け橋たらんとした新渡戸稲造であることは、人の知るところである。彼の受洗はこの書込の前年明治十一年十一月である。

和装本の綴代ふかくに金箔の細片をのぞき見して、それを取り出したことがある。その和装本は北駕文庫に至るまでの疲れ、そしてこの文庫での水災の跡をとどめ、金襴緞子の装幀はかつての輝きをうしなっていたが、その金箔の細片は純金の輝きをもつものであった。金襴緞子のうえの題簽は「古歌集」と読むが、能筆の写本でまず「むかしおとこうゐかうふりして」の語ではじまり、各段のはじまりは「むかしおとこ有けり」をもち、古今、新古今の和歌がちりばめられているを読むものであった。この「むかしおとこ有けり」の言葉で、「古歌集」との異筆題簽は内容とは無関係であり、古典に知識をもたない、後の別人の手になることを多くの人はさとるはずである。

「伊勢物語定家本系統本中、天福本系統と認定される。百一段の『人おほみ』の書写例より『伝定家本筆』（学習院大蔵）天福本の書写本系下に属するとみなされる。」とのメモを昭和五十年八月五日、調査に訪れた、伊勢物語についての多くの業績をもつ、当時亜細亜大教授の山田清市氏がのこしている。「書写は室町―江戸初期ころで、伊勢の写本中、能筆家の手になるものである」とのメモをも読む。

綴代深く見い出した金箔の細片は両の見返しをかざった金箔の裁ち屑であったことを知るが、その金箔はほとんど剝離していて、かつての輝きをしのばせるだけである。

（いしむら　よしのり　北駕文庫担当）


Paul I. Ota.
Sept. 1879.
SCIENCE PRIMERS, edited by PROFESSORS HUXLEY, ROSCOE, and BALFOUR STEWART.
LOGIC.
Science Primers.
From Mr. O. Nagai
LOGIC.
BY
W. STANLEY JEVONS, M.A., LL.D., F.R.S.,
PROFESSOR OF POLITICAL ECONOMY IN UNIVERSITY COLLEGE, LONDON.
佐藤文庫
London:
MACMILLAN AND CO.
1876.
[The Right of Translation and Reproduction is Reserved]

留学生リレーエッセイ

馮　　玲
（中国　寧波市出身）

「往前看（ワンチェンカン）」と「往銭看（ワンチェンカン）」

私は日本に来て３年になりました。日本人の合理的な考え方にけっこう意識的かつ無意識的に馴染んだせいか、かえって、私を生み育ててくれた自分の国に違和感を感じるようになりました。

来日以来、１年或いは半年ぶりに帰国するたびに、町が驚くほど変貌しているのが実感できます。インフラの建設から、デパートの込み合い、鉄道・空港便の増加、人々の歩くスピードまで、経済発展によって、中国の社会全体が活気に溢れてきていることがわかります。でも一方、マイナス面も無視できないぐらい目立ってきています。

この文章のタイトルの「往前看」という言葉は中国でよく使われているスローガンです。「前」は前方という意味で、すなわち貧困から脱し、経済を発展させ、先進国を追いかけようという呼びかけです。でも、「前」を「銭」に変わると、中国語の発音は同じですが、意味がずれてしまいます。「銭」はこの文字通りお金のために、頑張ろうという意味になります。現実の中国を見ていると、「往前看」は「往銭看」になりつつあるのではないかと心配になります。

去年12月、私は青島空港につき、いきなりエイズ・梅毒有無の血液検査を強制的に受けさせられました。しかも、それきりで返事がありませんでした。中には、ただお金を払って、検査せずに済む人もいました。そういう検査は何のためなのか。何の意味をもつのか。不満、反感しか招きません。また、空港内では、手押し車を利用しようとすると、お金を先払いしなければなりません。タバコを吸いたくなると、喫茶店に入るしか方法がありません。空港から出て、タクシーを呼ぼうとすると、メーターがついているにもかかわらず運賃の交渉から始まります。

先回、私は青島から車で８時間ぐらいの行程を移動しましたところ、途中通行料がかかる場所が20カ所もありました。新築の橋や道路だったら、文句のいいようがありませんが、半分以上は昔自由に通行できた道だそうです。似たような例は少なくありません。

ある日、私は有名な観光地に足を運びました。何と、８カ所の施設につき、ひとまとめにチケットを買わされました。時間の関係で、中の３カ所しか見物できないと言っても、全然融通がききませんでした。ここまで来たからには、お金を惜しんで帰るわけには行きません。がっかりしたのは建物中の部屋などはほとんど土産物屋になっていたことです。私は高いチケット代を払ってお土産を買いにきたような気分になりました。さらに、頭にきたのは同一建物の２階に上がりたいときにまた別料金が必要だったことです。

「金がものをいう」時代が来てしまったのでしょうか。私利私欲をむさぼり、自分さえよければ、他人のことはどうでもいいという発想をもつ人が増えつつあるようです。個人から企業、政府まで争って「往銭看」、一生懸命にお金ができる窓口を探し、できるかぎりに税金をごまかします。経済成長を遂げているといえども、精神文明が衰えていくのでは、前途も楽観できません。残念な思いでいっぱいです。

（ヒョウ・レイ　人文学部日本文化学科２年）

傳(でん)と傅(ふ)のことなど
～その二～

石　村　義　典

明治四十二（1909）年八月の韓国皇太子李垠の北海道行啓は新撰北海道史、新北海道史にともにその本文の記述には見い出せず、わずかに年表に一行の記述を読む。それも河野北海道史付録年表に依拠踏襲しているにすぎずない。河野北海道史本文に「韓国皇太子李垠行啓」が記録されることになっていたかどうかは、河野北海道史が本文第一（明治維新前）のみの刊行で、本文第二、三は未完におわったことによって確かめることはできない。河野北海道史本文第一、付録第三（地図）は配布されたが、「韓国皇太子李垠行啓」を歴史からの抹消を救い、記録する年表をもつ付録第一は配布を許されず、印刷業者三秀舎の倉庫に眠ること四年数カ月ののち、関東大震災で灰燼に帰している。河野北海道史付録第一の配布禁止はこの韓国皇太子李垠行啓記事にのみに帰因するものではなく、「韓国皇太子李垠行啓」はその配布禁止要因の一をなすにすぎないとうけとる。大正八(1919)年の御用始め早々の一月七日、河野常吉は時の北海道庁長官俵孫一自身がエンピツで抹消箇所を指示した年表を渡されており、彼の日記に改定作業にとりかかっているともとれるメモを読む。北海道庁の正史から抹消さるべきものは、生存する道庁関係者に不利益をもたらすと考えられるすべての歴史事実の抹消であった。もちろん当の俵孫一北海道庁長官自身への不利益をもたらすことの予防措置をもふくむものである。

「韓国皇太子李垠行啓」の歴史事実の抹消は、生存する道庁関係者に不利益をもたらすということではなく、それよりも高い次元よりの判断である。「行啓」が河野北海道史付録年表で「来道」「巡覧」となっていることにも、端的に読みとることができる。明治四十二年の韓国皇太子李垠行啓の翌々年の明治四十四年に東宮殿下（大正天皇）の行啓がある。この東宮殿下行啓を、より華やかに効果的に演出するためにも、韓国皇太子李垠行啓を歴史から抹消することの強い要請をもったはずである。その歴史からの抹消は、韓国が併合されている明治四十四年の東宮殿下行啓の段階においてではなく、韓国皇太子李垠行啓直後の翌月九月頃からそれの痕跡を追跡することができる。その行啓の前月七月には閣議は韓国併合を決定しており、東宮殿下北海道行啓奏請を北海道会が満場一致でもって建議したのはすでに明治四十一（1908）年十二月で、韓国皇太子李垠北海道行啓より以前である。東宮殿下行啓は韓国皇太子李垠行啓の翌年明治四十三年に準備されていたのを知るが、その一年延期も東宮殿下行啓を、より効果的に演出するための冷却の時間、時間稼ぎとしか解せられない。

（いしむら　よしのり　北駕文庫担当）

北海学園大学附属図書館報　図書館だより Vol.19 No.2（通巻142号）
本館　〒062　札幌市豊平区旭町4丁目1番40号　工学部図書室　〒064　札幌市中央区南26条西11丁目
☎（011）841－1161　本館内線　270～275・279　工学部内線　813・814　印刷所：㈱アイワード